

冬の記憶から

やまね まさゆき
山根 正幸 ●連合 企画局長

1月下旬、連合本部に1通の少し遅めの年賀状が届いた。子どもと思われる手書きで「千代田区神田駿河台 連合本部 ユニオニオン様」のあて名。裏面には「謹賀新年」の文字と、色鉛筆で描かれた連合の公式キャラクター「ユニオニオン」。組合員のご家族なのだろうか。家族の間で連合のことを話題にさせていただいているのだろうか。いずれにしても、こうした反応を直接いただけることはありがたい。

さて、この冬は例年より寒く、北日本や西日本をはじめ各地で大雪が相次いでいる。市街地の除雪がはかどらず歩行者や車が往生する様子や、交通機関に大きな影響が出たことが報じられたのは記憶に新しい。温暖化による気流の変化と海から供給される水蒸気量の増加が不測の大雪を起こしやすくしていること、高齢化による熟練の除雪作業者の不足、加えてコロナ対策の影響…様々な要素が対応を難しくしていることが指摘されている。地球環境や人口減少の影響は今後も続くだけに来年以降も気がかりだ。人手不足の背景には財政上の問題や除雪従事者の労働環境も指摘されている。人手不足を補うため、デジタル技術を活用した除雪無人化の研究も進んでいるそうだが、地域生活を下支えする労働が適正に評価されることも大切ではないかと思う。

毎年、大雪や寒さに関するニュースを見るたびに、子どもの頃を過ごした30数年前の北海道の記憶が思い起こされる。住んでいた鉄道住宅では除雪当番があり、吹雪のときも朝一番で雪

はねを手伝った。暖房・断熱機能が向上した今ではもう無いのではないかと思うが、地元の学校では朝の気温が基準を下回ると始業が繰り下がる（記憶は不確かだが、 -25°C で1時間、 -30°C で2時間など）ため、毎朝、基準となる朝6時台のNHKの気象情報を注目していた。冬休みには、保線に携わっていた父の職場と家がすぐ目の前だったこともあり、父が乗る除雪車をよく眺めていた。その父が現役時代、家で職場や組合のことをたびたび話題にしていたことも思い出す。今にして思えば、こうした環境が私にとっては早くから働くことを身近に意識させ、労働組合と接点を持つきっかけの一つにもなっていたのかもしれない。

今、家族や友人知人との会話の中で、仕事の話は話題になると思うが、労働組合の活動や役割に話題が至ることは、はたして世の中でどれくらいだろうか。労働組合に関する認識やワークルールの知識は、これからの世代にとって、就業意識への影響だけでなく、労働組合に対する理解・共感の入り口にもなる。連合は早い段階からの労働教育の必要性を訴えているが、他方、日常生活の中で、家族や知り合いの間でワークルールや労働組合の話につながる工夫について、それぞれの場で何か考えられないものかと思う。

ユニオニオンの年賀状を送ってくれた子どもは、将来、労働組合やワークルールに関心を持っていてくれるだろうか。